

# 立命館慶祥中学校・高等学校 2019年度 学校目標 シート

教育目標	「世界に通用する18歳」の育成		中期目標	①自己の存在について自己肯定感を持って生活できる空間としての学校。 ②基礎学力、持久的体力、高い教養、強い倫理観を利用して問題解決に当たることのできる能力を育成する学校。 ③ボランティアなどを発展させ、社会に貢献することのできる学校。 ④海外から日常的に多くの人々が訪れ、世界を学びの場として活用し、立命館学園におけるグローバル教育の展開を実践する学校。 ⑤保護者が、学校の教育方針と教育内容に共感、賛同、協働し、教員に安心して相談することができる学校。				
区分	A. 課題(上位目標)	B. 目標 (中位目標)		D. 自己評価	E. 具体的施策 (どのような方法で)			
I	中高(大)一貫教育の成長モデルを確立する。	1 附属校の優位性を発揮した高大連携と、各種講演会等による豊かな人間性の育成。	(1) 学内進学5割(152名)を目指す。内、立命館アジア太平洋大学への進学者数30名を目指す。	A	①高3学年において、SPおよび他大コース生徒の進路指導の充実を図るなどして、学内進学者を増加させる。また、中3・高1・2学年において、立命館大学およびAPUキャンパスツアーを実施するなどして、両大学への興味関心を喚起する取組を進める。 ②学年と英語科が連携し、TOEFLの早期取得について体制整備を含めて話し合うとともに、外部講師を入れた課外でのTOEFL講座を開講し、430点を目指す授業、500点を目指す授業を切り分けて実施する。高1では、TOEFL-ITPテストの早期取得について体制整備を含めて実施を検討する。さらに、中学校においては、中学終了時の英語検定準2級100%を達成することができるように計画を立てて実行する。 ③④高大連携推進予算を有効に活用し、高大連携部を中心として、立命館大学およびAPUへの学内進学者数を増加させるべく実効性のある取組を展開する。高大連携部が英語科および各学年と連携し、新TOEFL551講座(トップアップ講座)の積極的な活用を図り、国際関係学部JDプログラムおよびグローバル教養学部への進学を促進する対応を行う。 ⑤生徒会役員と学年主任による会議を新たに開催し、生徒会役員の自治活動を育てる試みを行う。 ⑥部活政策検討委員会の答申を受けて、年次計画をたてて、クラブのあり方そのものを抜本的に見直す。			
			(2) 立命館コース生徒のTOEFLスコアについては、ITPテスト550点以上8人、500点以上25名を目指す。	A				
			(3) 立命館大学やAPUとの連携企画を実施する。	A				
			(4) 高大連携推進予算の実効ある活用を図り、両大学への進学動機を向上を図る。	A				
			(5) 生徒会活動や寮生による自治活動をとおり、生徒の倫理観やモラルを育てるとともに、リーダーを育成する。	B				
			(6) クラブ活動をとおり、生徒の倫理観やモラルを育てるとともに、リーダーを育成する。	B				
		2 学力向上を通じて、生徒・保護者・社会から高い信頼を得る。	(1) 2020年度進学先として「東京医50名」を目指す。	A				
			(2) 高校では、進路部と緊密な連携を図り、着実な実績向上、進路講習の実施、徹底した進路指導を行う。	A				
			(3) 中学では、各学年1月実施のアドバンステストにおいて、東京医合格の指標となる、SS60以上50名を達成する。	A				
			(4) 論述・発表・討論に関わる各種コンクールでの入賞者を輩出する。	A				
II	グローバル・多文化社会の中でSGHの活用を図るとともに、グローバルリーダーを育てる。	1 海外研修旅行を再検討し、グローバルリーダー育成に資する先進的なプログラムを構築する。	(1) 高校海外研修旅行のプログラムに新たに「課題解決型」の内容を取り入れ、共通課題に向けた協働の取組を実施する。	A	①高校海外研修旅行において「課題解決型」の内容を検討し、共通課題の解決に向けた協働の取組として、新たにTV回線などの利用により現地高校生との事前学習実施等を検討する。 ②中学NZ研修において、英語能力別のプログラムの検討を進め2014年度より一部実施したが、SPクラスを中心とした高い英語力の生徒のニーズに応え一層の検討を図る。 ③既存のコースの統廃合と新たなコースの創出など、2019年度以降の慶祥の海外研修について、執行部を中心として総合的体系的に見直し検討を開始する。			
			(2) 中学NZ研修のプログラム内容の充実を図り、英語力の向上を図る。	B				
			(3) 高校において、新たな海外研修コース設定の検討を開始し、慶祥しかできないプログラムを構築する。	B				
		2 学校間交流・長期短期留学プログラムの充実を図り、異文化理解・コミュニケーション力向上を進める。	(1) 生徒の海外派遣について、長短期留学派遣者数230名、海外研修派遣者数485名と合わせて、715名を目指す。	A				
			(2) 海外からの生徒受入れについて240名を目指し、生徒が日常的に世界を体験できる機会の拡大を図る。	A				
			(3) 英語指導方法の研究と英検・TOEFLなどの到達目標のステップアップを図り、留学の即戦力となることの出来る人材を育成する。	A				
			(4) 姉妹校提携や姉妹都市間交流などの交換留学を活用するとともに、SSHおよびSGHの活用を図る。	A				
		3 立命館コースの特色講座を中心に、SGHへの対応化を図り、グローバルリーダー育成を目指す。	(1) 各特色講座にグローバル課題に即したテーマ・教材を設定し、SGHによる講座内容の充実を図る。	A				
			(2) 学校設定科目である「観光開発」「国際社会」「アジア学」について充実を図る。	A				
		4 海外大学進学を促進するプログラムを充実させる。	(1) 2014年度に開催した「ハーバード・MIT研修」をより整備し実施する。	B				
			(2) 立命館大学国際関係学部JDプログラム、立命館大学グローバル教養学部に進学者各1名を目指す。	B				
		5 SSHに基づくグローバルな理系人材の育成と、RU理系進学者の質的拡大。医学部進学生徒の拡充。	(1) SSH基礎枠の取組を通じて理数教育を充実させ、理系の進学率を上昇させる。	B				
			(2) SSH重点枠認可校としてトップレベルの研究実践校としての評価を得る。	B				
		III	1 正義と倫理観を形成する人間教育と豊かな個性を花開かせる高いレベルの課外活動の実践を追求する。	「立命科」やクラブ活動等を通じた人間力の育成。生徒会活動や課外での社会貢献活動を通じた正義と倫理観の醸成。		(1) 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に参加する生徒を100%とする。	B	①立命科において社会貢献活動を検討・提案するなどして、校内的に社会貢献活動醸成のための下地を作る。 ②生徒会執行部会を定例開催し、中高生徒会の安定的な活動のための指導を行う。
						(2) 生徒会活動や寮生による自治活動を通して、生徒の倫理観やモラル教育を育てるとともに、リーダーを育成する。	B	

区分	A. 課題(上位目標)	B. 目標 (中位目標)		D. 自己評価	E. 具体的施策 (どのような方法で)
管理運営課題	安全・安心して生徒が通える学校作りと、危機管理が行き届いた学校作り。	1 いじめ・体罰のない学校作り。	(1) いじめや自殺等の重大事故を防止する取組を行う。	B	①中学では道徳・技術家庭科、高校では教科情報において行うとともに、学年でも機会ある度に取り上げ、未然防止に努める。また、スクールカウンセラーとの連携による教育相談をより充実させ、情報連携が必要な場合は、チーム会議を開催する。 ②立命館慶祥中学校・高等学校いじめ防止等対策基本方針に基づき、「いじめ」の早期発見を可能にするとともに、「体罰」を生まない集団づくりを行う。 ③学校行事により感動と達成感を共有できる生徒を育て、生徒の個性や多様性を認め合う雰囲気づくりを担当や学年を中心に醸成する。
			(2) 『立命館憲章』にある正義と倫理を持った生徒を育てる教員への啓発と学びを進める。	B	
			(3) 合唱コンクールや立命祭などの学校行事において、困難や軋轢を乗り越えさせる。	B	
	2015年を節目にした生徒募集活動の強化	1 中高入試体制の強化と寮政策の検討。	(1) 2020年度入試においても、2019年度同様、中高定員を充足させる。	A	①執行部が先頭に立ち、新規の塾開拓や新規の中学を開拓し、さらに地方創生人材育成制度を拡充し、地方生を集め寮の充足率を向上させる。 ②執行部、入試部が一体となって塾訪問、中学訪問を実施し、優秀生徒の獲得に努める。 ③学校案内パンフの刷新を図り、オープンキャンパスや学校説明会、海外における説明会、三越での説明会等、様々な入試広報活動を展開する。
			(2) 生徒募集活動の安定的運営体制を構築する。	A	
	慶祥教育を前進させる学校ガバナンスの改革	2 慶祥課題の達成へ向けた執行部体制の強化。	(1) 執行部ガバナンスの更なる民主的運営の確立と学校方針執行の推進を行う。	B	①教員が確実に4週8休を保證できる時間割を編成し、休日出勤の際の振替休日が完全に取得できるように執行部による休日取得管理を徹底する。 ②校務分掌の見直しを図り、教員が教育・生徒指導・学級運営に集中できる体制を整備する。 ③教員貸与のパソコンを活用して教員会議資料のペーパーレス化を図る。また、試験期間中の教員会議は原則廃止し、全教員が採点、成績処理に専念できる業務環境を作り出す。さらに、引き続き教員会議の60分設定を追求する。 ④総務部の業務の一部を事務室で担当する。また、全分掌に職員の担当者を付け、分掌会議に参加するなど、教職協働を追求する。さらに、教務事務のクレオテックへの委託化を進める。
			(2) 校務分掌体制や諸会議のあり方の検討と組織整備体制の改善を図る。	B	
			(3) 教員会議の効率的運用を目指して、教員会議資料のペーパーレス化、時間短縮を図る。	A	
			(4) 事務室との教職協働の検討。	A	
	その他	1 予算管理	(1) 予算の重点化の追求。	B	①予算の重点的執行を行う。 ②予算執行状況の定期的な確認と点検を実施する。また、経費削減・コスト感覚の涵養を図る。さらに簿外会計の点検を徹底する。 ③事務室業務、総務部業務、教務部業務等の一部外部委託を円滑に進める。
(2) 管理運営経費の点検と経費削減の品目の確認。			B		
(3) 学校事務の効率化を図るために、分掌業務、事務室業務の外部委託化をさらに進める。			A		
達成状況	<p>①学内進学の高制度化 ・学内進学は170名(立命館大学152名、立命館アジア太平洋大学18名)56.5%となり、目標の5割を達成するとともに、近年では最高の進学率となった。 ・TOEFL ITP®テストについて、550点以上は8名達成、500点以上は25名達成と目標を大幅達成した。</p> <p>②「東京医50」の実現 ・4月1日現在、東京医49(東大6、京大5、医学部医学科38)となり、目標値である東京医50にあと1名まで迫り、過去最高の結果となった。</p> <p>③グローバル教育・サイエンス教育の推進 ・長短期留学派遣者は230名となり、過去最高を記録した。また、海外研修を含めた海外派遣者は732名となり、過去最高となった。 ・海外生徒の受入は新型コロナウイルス感染症の影響で2月以降の受け入れがすべてキャンセルとなり、210名にとどまった。 ・SSH重点枠については、3年目の最終年度となり取組の加速化を図った。重点枠の柱の一つである「国際科学オリンピックメダルプロジェクト」については、国際科学オリンピックに挑戦する生徒を北海道から発掘し、日本代表としてメダル受賞者を育成するプログラムである。重点枠に採択された一昨年度からの3年間で6回の夏冬キャンプを開催し、道内からの中高生を計319名集めた。全道から集まった「道産子中高生」は、全国から招聘した物理・化学・生物・地学・数学に係る国際科学オリンピック指導の第一人者やオリンピック経験者である講師などのべ82名から指導を受け、国際科学オリンピック出場を目指し、志を同じくする仲間とともに高いレベルでの取組を行い、多くの刺激を得ることができた。重点枠のもう一つの柱である「国際共同課題研究」については、シンガポールのNational Junior College、タイのPrincess Chulabhorn Science High School Pathumthani、インドネシアのBudi Mulia Dua International High School、中華人民共和国の北京航空航天大学附属中学校の4校と協定を締結した。4校との国際共同課題研究は、本校がメインとなり、札幌南高校・札幌開成中等教育学校・札幌国際情報高校、札幌藻岩高校・国際基督教大学高校の5校とともに共同研究を推進した。 ・SGHは、2015年度に採択を受け、今年度は5年目の最終年度取組となった。SGHは、SSH同様、教育課程に変更を加え、他教科の協力も得ながら充実した取組を行った。SGHの研究開発名は「『共鳴』と『創造』マインドを育むー世界に通用する18歳ー」であり、課題研究テーマは「多文化共生を共に創る」とした。目的は、北海道に生きる者として、地域特有の課題を学び、異文化に「共鳴」し、世界の課題の解決方法を「創造」することである。高校1年次には、地域の課題をテーマとして「地域研究」、高校2年次には、世界の課題をテーマとして「海外文化研究」、高校3年次には、世界の課題の深掘をテーマとして「観光開発講座」、「国際社会講座」、「アジア学講座」の3講座を学校設定科目として関連付けた。この5年間、サハリン・十勝研修、ニュージーランド研修、タイ研修、アイヌ研修を実施し、北海道特有の課題を学ぶとともに、異文化に共鳴して世界の課題の解決策を創造する取組を行った。これらのSGHの取組は、慶祥に、異文化にある他者との違いを相互に理解し、認め合い、尊敬し合うことによって共鳴し、世界のさまざまな解決に向けて、言語や文化、宗教、生活習慣の違いを超えて新たなものを創造することができる人間を育成する土壌をつくりあげた。</p>				
改善策	<p>①学内進学の高制度化 ・スクールサポートスタッフの支援も得ながら、キャリアポイント等、高大連携部を中心に、中学(特に高大連携企画対象の中学3年)を含めた全学年団の尽力を得て高大連携企画を推進する。同時に、立命館大学およびAPUの北海道における知名度、人気を高める事業を折ある度に大学側に要望し、両大学への北海道全体における志望者を加速化させることも企図する。また、国際プログラム、課題懸賞論文への応募を一層励行し、学内進学への動機を強める。</p> <p>②「東京医50」の実現 ・進路部による結果分析と具体的な戦略の提示を早急に行い、学校全体でそのノウハウを共有・蓄積するとともに、それをベースに各学年と緊密な連携を図り、中1から高3までを貫くSP指導の高制度化を図る。また、「中学アドバンステスト」SS60以上の目標値を継続して設定する。さらに推薦入試・特色入試にも組織的に取り組む。</p> <p>③グローバル教育・サイエンス教育の推進 ・SSH重点枠は不採用となったが、タイのPrincess Chulabhorn Science High School Pathumthaniとの姉妹校関係をベースにした取り組みの継続について予算面の課題を検討する。また、2021年度再申請に向けて検討に入る。 ・SGH5年間の成果を学校設置科目において継続を図る。また、国内外の研修についても継続すべく予算面での課題を検討する。 ・海外研修プログラムについては、2020年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大を受け、「安心・安全」を最優先するため、プログラムの中止・延期はやむを得ないと判断する。個々のプログラムに対し早い段階で国際部と学校とで協議的的確な判断を下していく。中学3年ニュージーランド研修および高校2年海外研修もその対象とする。</p>				
学校関係者評価に関する事項	委員会の構成	委員長：佐伯智也(立命館慶祥中学校・高等学校保護者会会長) 委員：支部英孝(江別市教育委員会委員長職務代理)、林雅子(北海道旅客鉄道株式会社鉄道事業本部営業部長)、小笠原正浩(立命館慶祥中学校・高等学校教育振興会会長)、竹内彪(立命館慶祥副会長)、小島敏夫(学校法人立命館常務理事)、横澤広久(同一貫教育部部長)、久野信之(立命館慶祥中学校・高等学校校長)、江川順一(同副校長) 事務局：石井洋(同事務長)			
	委員会開催日程 主な議題	<p>&lt;第1回目&gt;2019年5月10日(金)10:00~11:30 議題：①2018年度学校総括について、②2019年度学校方針について、③授業参観とその評価</p> <p>&lt;第2回目&gt;2019年12月5日(木)10:00~11:30 議題：①2018年度前半期の学校の取り組み状況について、②授業参観とその評価</p>			
	評価、改善事項	<p>&lt;第1回目&gt;「2018年度立命館慶祥中学校・高等学校教育の総括」および「2019年度立命館慶祥中学校・高等学校の重点課題」について学校より説明を行い、授業参観を行った後、各委員の方よりご意見を伺った。授業参観については、新教室棟Co-Tanでの授業、ニュージーランドの高校生との交流授業を中心に行った。主にCo-Tanでの双方向授業や生徒たちの討議を中心とする授業の中でティーチングからファシリテーターに教員の役割が変化していくことや新たな教員の力量等に対する意見が出された。</p> <p>&lt;第2回目&gt;「2019年度前半期の学校の取り組み状況」について学校より報告し、新教室棟Co-Tanでの授業見学の後、各委員の方よりご意見を伺った。授業見学の感想としては、特にスマートフォンを使った授業について高い評価をいただいた。解のない問いに挑戦させる授業を通じて高い学力が身に付くこと、生徒が学ぶのではなく発表する授業など、今後の教育の在り方についても様々な意見交換を行った。</p>			